

「深い尊敬と神への愛」

意味のないと思うことに意味がある

週刊誌のお悩み相談コーナーに一人の女性が人生について相談していました。小学生のころから自傷行為を繰り返していた彼女は、「死んでも死ねない自分はどうやって生きていく意味を見出せばよいのでしょうか」と悩みを打ち明けていました。私たちは、自分に与えられている人生の意味がわかっているのでしょうか。「どうしてこんなことが？」と思うことがありますが、私たちが不要だと思っていることに大きな価値があり、価値があると信じていたことに価値がないことがあります。私たちは今しかわかりません。しかし、わからないからこそ、何が正しいことを探します。私たちの生きる意味、価値はイエス・キリストです。私たちが目の前で起こっていることを、このアイデンティティに立って解決していくときに、そのときには意味のないと思うことでも、後に意味を見出すことができます。

上を向いて歩こう

日航機墜落事故(1985年)で犠牲となった歌手の坂本九さんの代表曲に『上を向いて歩こう』という曲があります。神様のことを信じていた彼はこの曲のなかで「上を向く」＝「神様を見る」と歌いました。世の中の人々は彼の人生を不運と言うかもしれません。彼が事故にあったことに意味を見いだせないかもしれません。しかし、坂本九さんが歌った歌は、後の時代でも愛され、私たちに「上を向く」ことを伝えています。

聖書の中にマルタとマリヤという姉妹の話があります。イエス様はこの姉妹とその兄弟ラザロを特別に愛していました。イエス様と弟子たちが彼らの住むところを訪れたとき、姉のマルタはイエス様を精一杯おもてなししようと忙しく立ち振る舞っていました。一方、妹のマリヤはイエス様の足元に座り、その言葉に聞き入っていました。それを見たマルタは「マリヤに私の手伝いをするようにおっしゃってください」とイエス様に訴えます。すると、イエス様はこうに答えられました。

『マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことを思い煩って、心を乱しています。しかし、必要なことは一つだけです。マリヤはその良い方を選びました。それが、彼女から取り上げられることはありません。』(ルカの福音書 10:41)

「マリヤはその良い方をえらんだ」と言うのは、姉のマルタがしていることが悪いという意味ではありません。2人ともイエス様がくることを喜び、それぞれに与えられた大事な役割、意味を見出そうとしていました。マルタには大好きなイエス様をもてなしたいという正義が、マリヤには大好きなイエス様の側にいたいという正義がそれぞれにありました。しかし、自分の主権や自分の正義で相手を見ると、その人がしていることに腹が立ち、相手がしていることは間違っていると裁いてしまいます。何度もメッセージで語られていますが、正義は相手に向けるものではなく、自分に向けるものです。私たちが自分の正義を相手に振りかざした時点でそれは偽善となり、自分を神にしてしまう行為です。ですから、私たちは「上を向く」＝「神様を見る」ことが大切です。私たちが下を向いているときには元気がでず、意味を見いだすことができません。しかし、自分の経験や考え方を置き、視線を変えて上を向くならば、自分が正しくないことがわかり、そこに一筋の光を見出すことができます。

信仰とは深い尊敬と愛

『しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しき、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。』(I テモテ 6:11)

パウロはテモテに向かって「神の人よ」とモーセに語られた言葉を使って呼びかけました。それはテモテが自信を失っていたからです。モーセも同じでした。モーセは自分はダメなやつだと荒野に逃げ、自信をなくしていました。しかし主は彼に杖を与え、神の人としました。モーセのように、私たちの内側からお金や名誉、自分を知者だと思って相手と論じ合うような高ぶりがとられるなら、神様は私たちが「神の人」として用いることができます。だから「正しさを熱心に求めなさい」と言われています。それは、私たちが正しさを知ったとき、それを追い求めようとする敬虔がスタートするからです。敬虔とは真剣に学ぶことです。そして、正しさを学んだ人が敬虔を見出したとき、聖書を土台とした正しい判断(バイブルリテラシー)をすることができます。そして、正しくない者が正しくなれると信じられること、それが信仰です。正しい判断ができず、ろくでもない者で

あった私たちを信じ、身代りとなって十字架に向かわれたのがイエス・キリストです。十字架刑にかかる前、ローマの総督であったピラトは「あなたは王ですか？」とイエス様にたずねましたが、イエス様は「自分はユダヤ人の王です」とは言わず、「それは、あなたが言っていることです」と答えられました。

『私は、すべてのものにいのちを与える神と、ポンテオ・ピラトに対してすばらしい告白をもってあかしされたキリスト・イエスとの御前で、あなたに命じます。』(I テモテ 6:13)

正しい証言は、自分の意味を見出した人ができることです。ですから、私たちは相手を信じて愛そうとします。その愛があるから忍耐ができます。柔和とは、何度でもその相手と向き合い、愛し信じ続ける行為です。これらを熱心に求め、愛し信じ抜くときに私たちは信仰の戦いを勇敢に戦い、永遠のいのちを獲得することができます。

『私たちの主イエス・キリストの現れの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。』(I テモテ 6:14)

どれだけ誹謗中傷されたとしても、私たちが間違った証言をせず「はい」は「はい」、「いいえ」は「いいえ」と答え、正しく神様を見るなら、悪い行いが必ず明るみに出されるように、善い行いも神様が必ずあとになって示されます。

『その現れを、神はご自分の良しとする時に示してください。神は祝福に満ちた唯一の主権者、王の王、主の主。』(I テモテ 6:15)

だから、私たちが王の王、主の主になってはいけなさとパウロは綴っています。『誉れと、とこしえの主権は神のもの』(I テモテ 6:16)であるのに、私たちは自分が王になり、神になり、意味を見出そうとしていないでしょうか。意味はあとになって“そういうことだったんだ!”とわかります。私たちがすることは、自分で意味を見出すのではなく、意味がないと思えるようなことに神様の深い意味があることを信じて、待つことです。

最後のランナーの生きた証し

パリオリンピックで金メダルを獲得したエリック・リデルは、1925年、宣教師として中国・天津にわたります。戦争が激化するなか、当時の天津を統治していた日本軍によって抑留されます。そして収容所に送られた彼は、そこで一人の青年スティーブン・メティカフと出会います。青年スティーブンは、自分たちを過酷な環境下に置き、親を殺した日本軍を絶対に許せない、いつか仕返しをしてやると思っていました。あるとき、スティーブンはエリックが宣教師になった理由を問います。するとエリックは「多くの人は銃を持って日本に行く。しかし私は愛を持って日本に行こうと思う。それを先にやった人がいるから、私は走り続けるんだ」と答えました。最初は日本に対して憎悪しかなかったスティーブンでしたが、後に日本に対する祈りが変えられていきます。そして、エリックの意志を継ぐ形でスティーブンは日本で宣教師となり、40年間にわたり生涯を捧げました。彼は生き方を変えることができたのです。

私たちの正義は人を変えることができません。そして、その正義は自らをも滅ぼしてしまいます。収容所のなかでも走り続けるエリックの姿を見た多くの人が憎しみから解放されました。そして、視線を変えることができたその人たちは、のちに多くの人を生かす人になりました。そのときには意味がわからなくても、それが届いたときに奇跡を起こします。種を植えて芽が出て実がなるまでには多くの戦いがあります。しかし信じて水をやり続けた人は神の栄光を見ることができます。

さいごに…

『上を向いて歩こう 涙がこぼれないように

泣きながら歩く 一人ぼっちの夜』

一人ぼっちに感じる夜であっても、私たちは一人ではありません。なぜなら、私たちのすべてを負い、ともに歩んでくださっている方がいるからです。ですから、逃げずに、信仰の戦いを戦い抜くために、神の正しさを求めましょう。正しさを神に見出し、相手を信じて愛そうとすると、私たちは自分を愛してくれた人を知ることができます。私たちが自らの視線を変え、生き方を変え、『正しき、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和』を選ぶとき、永遠のいのちを獲得することができます。

(要約者:岡本 享子)

(2022年 5月 22日)